

Project  A06	地域協働専攻 国際協働グループ  <b>地域の英語教育の現状と課題の調査</b>
メンバー	[学 生] 塚原来未 佐藤咲里 高橋唯人 佐藤蒼太 [担当教員] 佐々木昌太郎
<p><b>【背景】</b>  文部科学省は「第3期教育振興基本計画」の中で、CEFR A1相当以上を達成している中学生、CEFR A2相当以上を取得している高校生の割合をそれぞれ50%以上にするを目標として定めている。しかし、令和3年時点で中学生47%、高校生46.1%と目標を達成できていない。このことから、私たちは現在の英語教育のどのような点に課題があるのか関心を持ち、調査を実施することにした。</p> <p><b>【目的】</b>  プロジェクトの主な目的は地域の中学校・高等学校における英語教育の現状と課題を調査することである。また、メンバー全員が英語の教員免許取得を目指しているため、将来地域に貢献・活躍できる英語教員として求められる資質を把握することも目的の一つとして活動した。</p> <p><b>【概要】</b>  前期はインプット活動として、実際に現場で働く英語科教員へインタビューを実施し、インタビューの結果を分析・考察した。後期はアウトプット活動として、前期で実施したインタビューに対する分析・考察の内容を函館英語英文学会で発表した。また、函館市内の高校を訪問し、生徒との交流を行った。</p>	
<p><b>【実施内容】</b>  前期では、函館市内の学校の教員へのインタビューを中心に地域の英語教育の現状と課題の把握に取り組んだ。事前に現状を把握するためにインターネットを通じて情報収集を行った。その際に、高等学校では平成21年、中学校では平成29年の学習指導要領の改訂により「授業は英語で行うことを基本とする」という文言が明記されたことを知った。また現代では、Google翻訳やチャットGPTといった翻訳ツールが発達している。これらのような変化がもたらすメリット、デメリットを知ることで英語教育の現状と課題の把握につながると考えた。したがって上記の二つを中心にインタビューの質問内容を構成した。</p> <p>後期では、前期に得た情報を元に函館英語英文学会での発表を行った。また、高等学校を訪問し、高校生との交流を行った。交流の内容としては、前半はプレゼン形式で、大学生活やアルバイトで使える英語表現についての授業を行った。後半は少人数のグループに分かれ個別の交流を行った。</p>	
<p><b>【成果】</b>  インタビューにより以下の意見を得ることができた。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 学習指導要領の改訂による変化：もともとオールイングリッシュで行っていたため大きな変化はないが、メリットとして生徒が英語に触れる機会が増えるというものが挙げられた。その反面、オールイングリッシュだと置いて行かれる生徒が出てしまうというデメリットも見られた。</li> <li>2. ICT技術発展による変化：使いこなすことでより深い英文理解につながる、生徒のみならず教員のサポートにもつながっているといったメリットが挙げられた。しかしながら、コピー＆ペーストになってしまう可能性がある、使いこなすのに時間がかかる等のデメリットが挙げられた。</li> </ol> <p>函館英語英文学会での発表の場で、高等学校・中学校について調査を行うことは大切であるが、小学校との連携も視野に入れると良いというご指摘をいただいた。また、高等学校を訪問し高校生との交流を行った際には、授業の導入では身近な話題から徐々に本題に入ることが大切であること学んだ。また、スライドを作る際には見やすいフォントや色などを使用するべきだというような将来教員になった際に生かせる知識を多く得ることができた。</p> <div data-bbox="1098 1798 1417 2033" data-label="Image"> </div> <p style="text-align: right;"><b>【学会発表の様子】</b></p>	

## 【総括と反省・今後の課題】

前期では、各学校の教員の方々へのインタビュー調査を中心に行うことで函館市内の英語教育の現状に関して知識を深めることができた。後期では、函館英語英文学会における発表を通じて外部の方々から様々な視点による意見をもらうことで、問題に対する考えを深めることができた。

前期の活動と比較して、後期は学会発表などを通じてより様々な視点からの意見を得ることができた。一方で、実際に教育を受ける立場である中学生、高校生の意見をあまり聞くことができなかった。そのため、より広い意見を聞くためにも、中学生、高校生から意見を聞く機会を今後設けていきたい。

活動を通じて、目的である地域に貢献できる教員として求められている資質について全体で意見を深めることができた。私たちが今後教員として身に付けるべきことは主に二つあると考える。一つ目は、生徒の思考を高めるような発問を考えることである。現在はICT機器が発達し、調べればすぐに答えにたどり着けるような社会になっている。一方で、ICTは私たちの生活に強く結びついているためそれを制限することも現実的ではない。そこで、ICTを目的ではなく手段として生徒に使用させるため、生徒の思考力を高めるような発問をすることが重要であるとする。二つ目は、授業により興味関心を持ってもらえるような授業づくりをすることである。インタビュー調査の中で、小学校で英語が教科化されたことにより英語嫌いが増加したという意見があった。また、オールイングリッシュの授業が中学校でも基本となり、これによって英語嫌いがより増えてしまう可能性も考えられる。そこで、教員がそのような生徒を増やさないためにも、生徒に興味関心を持ってもらえるような授業づくりが重要であるとする。

今後の課題として、調査対象の範囲が狭かったことが挙げられる。今回、調査対象を中学校、高等学校に設定していた。しかし、小学校でも英語が必修化、教科化されたため小学校まで調査対象を拡大する必要があると考える。さらに、今回は函館市内でも限られた中学校、高等学校にしかインタビュー調査することができず、その数は合計3つにとどまった。地域の英語教育に関する実態把握をより進めていくためにも、中学校、高等学校でもより多くの学校にインタビューを実施することが今後必要である。また、先ほども挙げたが、今回のインタビュー調査では教員側がメインであり、教えられる側の生徒の意見を聞く機会が少なかった。そのため、今後は生徒側に対してもインタビュー調査やGoogle Formを用いたアンケート調査を行い生徒側の意見も考慮したうえで地域の英語教育に関する現状把握を進めていきたい。

## 【地域からの評価】

函館英語英文学会を通して、参加者の方々から様々な意見をいただいた。私たちの研究を評価いただき、改善点を提案していただいた。

地域の中学校や高等学校との関わりを通して、私たちが教員になった時に気を付けなければならないことや、英語教育の重要な点などを教わった。現職の先生方から授業法に関する具体的なアドバイスや今後の英語教育に関わる変化として予想されることに関して情報提供をいただいた。

高等学校との交流を通して、私たち大学生のことを知りたいと興味を持っている高校生がたくさんいることがわかった。私たち大学生の活動をもっと発信したり、交流を増やしたりすることで、大学に興味をもつ生徒が増える可能性があるという声を聞いた。そのため、本プロジェクトの活動は英語教育のみならず、高校生の進路にも影響を与える可能性があるという評価をいただいた。

## 【その他】年間スケジュール

### ■前期

- 4月14日 第1回「プロジェクト内容決定」
- 4月21日 第2回「計画作り」
- 4月28日 第3回「調査報告・事前学習」
- 5月12,19日 第4,5回「質問内容プレゼン」
- 6月2日 第6回「質問リスト作成」
- 6月9日 第7回「質問リスト資料確認」
- 6月16日 第8回「中間発表役割分担」
- 6月23日 第9回「インタビュー準備」
- 6月30日 第10回「高校インタビュー」
- 7月7日 第11回「中学校インタビュー」
- 7月14日 第12回「高校インタビュー」
- 7月21日 第13回「中間発表準備」
- 7月22日 第14回「中間発表会」

### ■後期

- 10月5日 第1回「スケジュール作成」
- 10月12,19,26日 第2～4回「学会発表準備」
- 11月1,9日 第5,6回「学会発表準備②」
- 11月11日 第7回「函館英語英文学会発表」
- 11月16,30日 第8,9回「高校交流の準備」
- 12月7日 第10回「高校交流の準備②」
- 12月15日 第11回「高校での交流本番」
- 12月21日 第12回「振り返り、レビュー」
- 1月11日 第13回「発表会準備」



